

# 令和4年度 生徒指導部会研究計画

## 1 研究主題

子どもたち一人一人が輝く生徒指導の充実  
～「自己存在感」「学習指導」「社会的なリテラシー」に視点をあてた指導・支援～

## 2 研究主題の設定について

現在の日本社会は、高度情報化やグローバル化の進展、少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、人工知能（AI）の飛躍的な進化をはじめとする絶え間ない技術革新等により情勢が急速に変化している。また、社会構造や雇用環境がますます多様化・複雑化しており、子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎える予想される。

そのような中、学校教育には、一人一人の子どもが、自分のよさや可能性を認識するとともに、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと等が求められている。

同時に、このような社会の急速な変化が、子どもや家庭・地域社会に様々な影響をもたらす、学校教育の役割が拡大し、学校現場が抱える課題も多様化・複雑化してきている。いじめ、不登校、児童虐待、SNS やオンラインゲームなどをめぐるネット上でのトラブルや健康問題等、様々な課題が深刻化してきている。

そこで、このような諸課題を未然に防いだり解決したりしながら、子どもたちが充実した学校生活を送るためには、教育活動全体を通じ、生徒指導の一層の充実を図ることが必要となってくる。生徒指導とは、学校の教育目標を達成するうえで学習指導とともに重要なものであり、子ども一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる指導・支援である。近年では上述のように、課題の多様化・複雑化にともない、生徒指導の柱とされる3機能が拡張していることが指摘されており、「生徒指導の最終目的は社会的なリテラシーの育成にあるといえる」と生徒指導提要にも示されている。つまり、様々な関わりの中で社会を読み解く力が必要であり、それがこれからの社会の形成者としての資質・行動力なのである。

生徒指導部会では、令和元・2年度の研究大会で、「自分」「集団（仲間）」「学び」という3つの視点で研究に取り組んだ。「自分」と向き合いながら、様々な課題を解決できる指導・支援の在り方、「集団」とともに課題を解決していく指導・支援の在り方、「学び」に視点をあてた指導・支援の在り方について研究を進めてきた。

令和2年度からは、生徒指導について、「自己の存在感を実感しながら、学習指導と関連付けながら、充実を図ること」と示されている、新学習指導要領の内容を踏まえながら、これまで取り組んできた研究の流れを受け継ぎ、「自己存在感」「学習指導」「豊かな心」の3つの視点で研究を進めている。すなわち、自己の存在感を実感しながら、学習指導と関連づけて充実を図る実践を重ねている。今年度は、今までの研究を土台に「自己存在感」「学習指導」、そして、これからの社会に求められる「社会的なリテラシー」の3つの視点から研究をしていくことにしたい。すべての子どもが安全に・安心して楽しく充実した学校生活を送り、自己実現できることをめざし、これら3つの視点について、昨年度の研究を引き継ぎ、より効果的な指導・支援の方策を探っていく。県内の様々な地域や学校の実態・実情に応じた具体的な生徒指導の取組について、指導者が実践共有できるよう研究を進め、主題に迫っていききたい。

## 3 研究の視点について

### (1) 児童が「自己存在感」を実感できる指導・支援の在り方

生徒指導提要には、「生徒指導は、… 日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意すること」と示されている。

子どもたちは、学校生活の様々な場面で、自分の良さを生かし、その努力が認められることで、自己存在感を実感する。また、教師の働きかけとともに、子どもたち自身が集団の中で高め合っていくよう支援することで、「誰かの役に立っている」「誰かに必要とされている」という意識が生まれる。さらに、「人と関わりたい」という意欲が高まり、社会性の伸長につながっていく。そして、子どもたちは、いろいろな活動に意欲的・主体的に取り組む、充実した学校生活を送ることができると考える。

このように、子どもたちが「自己存在感」を実感することは、効果的な生徒指導の推進に必要な不可欠と考え、「『自己存在感』を実感できる指導・支援の在り方」を視点として研究を進める。

#### 【具体的研究の方策】

- ・一人一人の子どもが活躍できる行事や学習活動の実施
- ・互いの良さや個性を認め合うことができる学級経営
- ・達成感や成就感を実感できる教育活動の計画、実施
- ・自己存在感を生む肯定的評価の工夫
- ・ポジティブな行動支援（PBS）の推進
- ・自己存在感を育む家庭や地域、関係機関との連携

### (2) 「学習指導」に視点をあてた指導・支援の在り方

子どもの学校生活の基本は、日々の授業である。子どもたちが充実した学校生活を送るためには、各教科の授業において、子どもが意欲的に取り組み、わかる喜びを実感することが大切である。

また、「学習指導」について、新学習指導要領には、「学習指導と関連付けながら、生徒指導の一層の充実を図っていくこと」、それは「分かる喜びや学ぶ意義を実感できない授業は児童にとって苦痛であり、児童の劣等感を助長し、情緒の不安定をもたらし、様々な問題行動を生じさせる原因となることも考えられる」からと述べられている。

これらのことから、効果的な生徒指導を推進するには、学習指導を充実させることが、重要であると考え、『学習指導』に視点をあてた指導・支援の在り方を視点として研究を進める。

#### 【具体的研究の方策】

- ・よくわかる授業の実践
- ・「主体的・対話的で深い学び」の授業の実践
- ・個別最適な学びを目指した授業の実践
- ・一人一人に自信をもたせる授業の実践
- ・授業力向上のための効果的な研修の実施
- ・教材研究の工夫

### (3) 「社会的なリテラシー」の育成をめざす指導・支援の在り方

いじめやネットトラブルなど、生徒指導上の問題行動の多くは、他人を思いやる気持ちの希薄さや規範意識の低さ、コミュニケーション力の欠如などが要因として起こると考えられる。子どもたちが、相手の気持ちを考えたり、思いやりをもったり、他人の痛みを理解したりすることは、子どもたちの問題行動を未然に防ぐために不可欠な内面形成である。

生徒指導提要では、「単に、知識や技術、断片的な個々のリテラシー、社会的な資質や能力を身につけるだけではなく、『社会の中で、その時々状況を判断しながらそれらを適切に行使することによって、個人や社会の目的を達成していく包括的・総合的な能力』が『社会的なリテラシー』であり、自己指導能力や課題解決能力の育成にもつながる生徒指導の最終目標であるといえる」と示されている。つまり、社会の中で、公正な判断ができるような価値観を児童が自分自身において育み、それらを統合して主体的に適切に行動できるような指導を充実させていく必要がある。

そこで、それぞれの発達段階に応じて子どもたちの「社会的なリテラシー」を育成することが、効果的な生徒指導を推進するためには重要であると考え、『社会的なリテラシー』の育成をめざす指導・支援の在り方を視点として研究を進める。

#### 【具体的研究の方策】

- ・情報モラル教育の推進
- ・規範意識や公共の精神を育てる道徳教育の充実
- ・他人の気持ちを考え行動できる人権教育の推進
- ・人権尊重の視点に立った学級経営の実践
- ・支え合う、認め合う、理解し合う集団づくり
- ・子どもたちが安全に、安心して過ごせる居場所づくり
- ・児童主体のいじめ防止委員会の活性化など、いじめを許さない集団づくり
- ・介護体験、車いす体験、ボランティア活動などの体験学習の実施
- ・人権講話などの子どもの心を耕す出前授業の実施

### 【参考・引用文献】

文部科学省（2010）生徒指導提要，文部科学省（2017）学習指導要領  
高知県教育委員会（2014）生徒指導ハンドブック ～豊かな心を育むために～  
森田洋司・山下一夫監修 徳久治彦編著（2019）新しい時代の生徒指導を展望する